

令和 7 年度七尾市総合教育会議 会議録

- 1 開会の日時 令和 7 年 1 1 月 2 7 日（木） 午後 4 時から
- 2 会議の場所 七尾市本庁舎 5 階 災害対策本部室
- 3 出席者 茶 谷 義 隆 市長
八 崎 和 美 教育委員会教育長
寺 岡 卓 子 教育委員会教育長職務代理者
石 坂 淳 教育委員会委員
- 4 欠席者 大 森 重 宜 教育委員会委員
山 田 理 平 教育委員会委員
- 5 事務局 善 端 直 教育部長
観 音 和 繁 教育総務課長
川 口 真 裕 学校教育課長
見 里 博 之 スポーツ・文化課長
関 森 香 住 スポーツ・文化課文化財復旧保全対策室長
酒 井 孝 治 図書館長
谷 内 仁 のと里山里海ミュージアム館長
楠 利 勝 教育総務課参事

6 開 会 (茶谷市長)

令和 6 年の能登半島地震から、もう間もなく 2 年になります。子どもたちの学習環境はまだまだ整ってない部分もありますが、文・化スポーツ施設も急ピッチで改修をし、子どもたちが学べる環境をしっかりとつくるといった取り組みもしっかりとしていかなければならないと思っています。

特に、田鶴浜小学校につきましては、解体して仮設の校舎で勉強してもらっていますが、新校舎も、令和 9 年の 4 月の供用を目指して、着工にこぎつけたところです。震災からの復興に向けて、子どもたちには、ハード・ソフト両面をそろえていくことが大変重要であると考えます。

いま、教育が抱える課題について、皆さんから忌憚のないご意見をいただきながら、将来の子供たちのことを考え、どのような方向で進めていけばよいかという話ができればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

7 議 事

- (1) 令和 7 年度七尾市教育行政の目標と基本施策の中間検証と令和 8 年度予算編成や施策の方向性について

(善端教育部長)

資料に基づき概要説明

8 意見交換

(石坂委員)

能登島では、子どもの数もかなり減ってきて、聞くところによると、来年の新入生が4人しかいないとのこと。そんな中、教育委員会の定例会で、教育長からコミュニティスクールを導入する予定だと聞いていて、来年度から複式学級になるのですが、元々魅力がある学校に、いろんなものを活用し、地域の人と関わり合いながら、これからの能登島小学校を作っていけたらなと思っているので、1つの方向の方向性としては良いのではないかなと思っている。

(八崎教育長)

少人数の学校だからこそのよさもあって、学びの面では、一人ひとりに目が届くというか、教師と子供たちの間が、学習面では目が届くということと、能登島は石坂委員が言われたように、地域が非常に学校に関わってくれて、地域の先生がたくさんいる。

能登島以外も小規模化していくので、地域と繋がって、子供を育てていかないと、教育の質を、維持していくことが難しいと思っている。能登島小学校をモデルとして、地域と学校等を一緒にどのように作っていくか、コミュニティスクールを設立して、地域と学校という形で取り組んでいただければと。

小規模のところを生かして、他の学校とオンラインでつなぐとか、合同学習ができるとか、特認校にして校区を外してしまえば、大きい学校では通えない子どもが通えるとか。小規模校ならではの教育、能登島の自然と文化を生かせたらという方向で考えています。

(寺岡教育長職務代理者)

全国的にも、そういう取組みはメディア等で取り上げられていて、海辺の町では、毎日魚さばきの授業があるとか、やはり子どもたちは地域で育てるのが一番大事だと思っています。地域のおばちゃんの人としていろいろな活動をさせてもらっている中で、子どもたちの応援団になりたい方々がたくさんいるので、うまく利用して一緒になって子どもたちを育てていく。七尾独自の仕掛けづくりができればよいと常日頃思っています。

(石坂委員)

能登島で子育てしてみたい、住んでみたいと思えるような学校になれば、移住も含めて、保護者が、子どもを育てる環境として求められる部分があると思っている。

能登島がモデルとして取り組めば、他の七尾市の学校でも、取り入れられたりすることができるのではないかなと思うので、モデル校として先行すればよいのではないかなと思う。

(茶谷市長)

七尾市内の学校と、市外の学校との交流することがありますが、身近なところで、地元七尾の小学校が、能登島行って能登島で学ぶ、素晴らしいところがあればその環境で、一緒にするのもいい方法ではないかなと思う。

それぞれの学校で特色があって良いところがあると思うので、児童生徒が、お互いに良いところを学ぶような機会があってもよいと思う。

(寺岡教育長職務代理者)

以前、有磯小学校と灘の地区では海の運動会があって、地域の方と子供たち

と保護者の方が、その土地ならではの海での運動会されたってということがとても頭に残っていて、例えば、海のない地域の学校から行くという交流も一つだと思う。

(八崎教育長)

地域と密着した総合的な学習というか、ふるさとを大事にした学びを全校で行っています。市内のすべての子どもたちが、七尾のお祭り、七尾城から、ガラス美術館、のと里山里海ミュージアム、図書館など、七尾の宝を体験すると同時に、中島地区だったら中島地区特有の、総合学習をする。小中学校9年間で、七尾城へは必ず登るはずなのです。

来年度から、第二期である「ふるさと七尾SDGs 2.0」を展開しようと思っています。若手職員が、ふるさと教育についてレポートを書かれて、地元の高校生とのコラボ、地元企業とコラボして、体験と学びをつなげるようなプランを立ててくれたので、それを来年度から少し取り組んでいきたいと。

これまで全部学校が背負って、学校が連絡調整していたところを、市長部局の方で、連携しながらやっていただける部分、学校の負担というか、働き方改革になって、先生たちは子供の学びに特化できるという話も持ち上がっている。

(茶谷市長)

地域のイベントとか行事は、その地域だけではなくて外の子どもも招いて体験できればいいと思う。我々の子ども頃は、自分たちのエリアしか基本活動していなかったの、隣の地域で何かこうそういう祭りやイベントにも無関心だったけど、行き来することによってお互いの文化というか地域の特色みたいなもの互いに学び合えるような環境も大事なかなと思う。

(寺岡教育長職務代理者)

御祓では、コミセン等で行事することも少なくなってきたのですが、仮設からも来て、子どもたちから元気をもらって笑顔で帰っていく。仮設とか、なかなか集まることができなかったところで、キッチンカーが来たり、「本はともだち号」が来たりとかがあればいい。「本はともだち号」に関していえば、いろいろな方々同士でコミュニケーションがとれたりするので、仮設へ持っていくとかして、いろんな笑顔が増え、広がればいい、本はすごく大事だと思っている。

(石坂委員)

「本はともだち号」は良いと思う。子どもたちが学校に行く楽しみの1つにもなっているのではないかな。仮設に行ったり福祉施設に行ったりと、移動図書館車を利活用するのは、とても良い発想だと思う。

(茶谷市長)

しかし、地域を跨いでいろんな活動をするにあたって、移動手段をどうするかというのは、保護者の考え方によって差が出てくると思う。そこをどうカバーするか。学校でまとまって移動するというのもありますが、例えば土日のイベントとか事業とか、それぞれの地域でやっているものに他のエリアから参加してもらおうとなるとやはり移動手段をどうするかというのは課題になると思う。

(寺岡教育長職務代理者)

子どもたちの体力が落ちてきていて、大森先生も心配されていますが、今後、日本の夏が益々熱くなって、四季が二季になり、体育館はだめ、外もだめ、プールもだめとなると子どもたちの体力の低下が心配なので、やはり学校の体育

館に空調を入れていただきたい。優先順位は多々あると思うが、避難所も関わることもありますし、子どもたちのことを思うと、それが一番だと思う。

コロナや震災を経て、子どもたちが、ストレスの発散方法が分からなくなってきたという現場の声もあります。子ども目線のイベントや遊べる場所、大人と関わりや地域の方と関わりの中でコミュニケーション能力が備わってくればと思う。

(茶谷市長)

先日、能登歴史公園で、モルック大会やチャンバラ体験などがあったのですが、子どもたちには雨は関係なしで、競技中よりも昼休みにお弁当そっちのけで一番元気にはしゃいでいたとのことで、そういう経験、環境をつくってあげればいいのかと思う。

(寺岡教育長職務代理)

当日、輪島の女の子がインタビューされていましたけれど、輪島ではなかなか遊べないけど、雨の中でも全然大丈夫、楽しかったと言っているのを聞いて胸が苦しくなりました。

(八崎教育長)

奥能登はなかなか大変で。七尾は早いうちに、体育館と運動場を直して、子どもたちがちが運動できるようにしていただいたのでストレスは少なかったかもしれませんが、寺岡委員が言われたように、もう四季じゃなくて二季なので、これまでだと水泳があるから、プールがあるからということでしたが、プールにすら入れないので、逆に体育館でできることと同時に水泳室内プールという方向に移していくということを進めていきたいと思う。

体育館の空調も、国の補助期限である15年までになんとかしないと。

そして、部活動の地域移行について、保護者からは、数が減って人数が減っていけば、運動しない子どもたちの体力の低下が気になるとのことだったので、学校体育の中での体力向上っていうのが大切になってきますので、空調の整備に向けて準備していかなければならないと痛感します。

学校訪問を通じての学校の今の授業とか、AIも入ってきていますが、学校教育体制みたいな授業の仕方についてはどうですか。

(寺岡教育長職務代理)

やはり一番問題だったのは、回線の問題ということで、予算も確保できたので改善することを願っていますが、現場では、教職員も大変だし、子どもたちも繋がらないと悲しい顔になるので、これを解消してあげたい。

とはいえ、この先ICTばかりではなく、人と人とのコミュニケーションすべきところも残しつつ、今後、生成AIも入ってきますが、社会に出るときには、やはりコミュニケーション能力が大切だと思いますので、ここだけは人と人で学び合うという場面が学校でも、家庭でもあればよいと思います。

(茶谷市長)

デジタル化オンリーにならないように、それが目的にならないように、環境をつくるとか、手段として利用するというところで、その中には人としての心の問題とか感性とかは、AIとかでは表現できないと思います。

(八崎教育長)

学校の先生の教育をする環境とか、省力化に繋がるとか、働き方に繋がれば

いいなという使い方なら。

D X化は避けられないし、何もしないと今度は逆にその闇の部分に落ち込む可能性があるんで、闇の部分を中心にちゃんと教えて、光の部分を使っていくっていう、道徳的なものも教えていきたいと思うし、自分の考えを、何かこう深めたり、広めたり、友達と意見交換するときに、調べたことまとめたこと I C Tを使ったことが役に立って友達と何かうまくコミュニケーションするための手段として使って、うまくいった、分かったという体験を中心に据えてやっていきたいと思っています。

(寺岡教育長職務代理者)

先日、中学校の家庭の時間に、子どもたちに、震災後に家庭で何か対策をしているか聞いたところ、半分以上が対策していませんでした。

震災直後は、水やヘルメットなど、いろいろ用意していたのですが、子どもたちの心の中には傷はあるかもしれないけれど、忘れてしまっている。七尾市として大きな捉え方として、家族で災害について話す日とか、そういうものがあってもよいのではないかと。

茶谷家でも、八崎家でも、石坂家でも、善端家でも、今日はこの話をしようという日が、図書でいえば「うち読の日」というのがありますが、するかしないかはそれぞれの家庭の判断ですが、そういう日を設けるのも1つなのかなと思います。

(石坂委員)

行政と教育委員会と七尾市 P T A 連合会の間で、子どもを育てるという方向性は同じなので、お互いに連携しているのかと思っていたのですが、実はあまり連携がないという。

市長と、保護者代表である市 P 連で懇談というか意見交換の場があったほうがよいと思います。今の保護者たちの思っていること、教育委員会の立場としての教育、こういう立場として教育行政やっているということ、市長が市長として子どもたちにどう育て欲しいかということなど、意見交換みたいな場が、年に1回の機会でもあれば、子どもたちに周りの環境とかそういうのが整えられることができギャップが生じないというか、保護者の思っていることと、行政が持っていることがちぐはぐにならないのではないかと。

(茶谷市長)

そのような意見交換の場が全くないわけではなく、先日も市 P 連の行事とかに参加させてもらいながらいろいろ課題を聞いていて、予算が足りないという話があったので、田鶴浜で行事をしていただくようなそういうものも、そういう話の中から、提案していただいた事業なので、もっとフラットにいろんなお話をしながら、どういう活動をしたらいいか、何がネックなのかを話し合える機会を、増やせばよいと思う。

(石坂委員)

保護者と教育委員会は相対する関係性ではなく、みんなで一緒に子供を育てたいっていう気持ちがあると思うので、同じ方向を向いていけるのがベストだと思う。そういう場があればいいなと。来年度やれたらいいですね。単に、要望だけじゃなくて、お互いに補完し合うようなことができればいい。

(八崎教育長)

教育行政の評価と点検のところでは、市P連の会長にきていただいてPTAの話も出るのですが、あくまでも点検評価なので、そういう機会はありませんでした。

10年ぐらい前はあったように聞いていますが、コロナや働き方改革でなくなってしまったのか分かりませんが。

歴史文化の継承の部分で何かないでしょうか。

(寺岡教育長職務代理者)

七尾のどこが好きかと聞かれれば、まず城山ですが、私は小丸山城址公園が好きで、最近下から眺めたときに寂しい感じになっているのが残念です。4月には小丸山城址公園の桜で県外の人を誘うことができたのですが、いまはできなくて寂しいという声もよく聞きます。歴史文化とは異なりますが、地域の宝を大切にしていきたいと思って回っています。

(茶谷市長)

七尾城や小丸城だけではなくて、演劇堂なり美術館、水族館もあり、いいものがたくさんあるということ、そうした価値観みたいなものを市民が共有できればいいと思います。

(八崎教育長)

七尾城跡は、いま修復しているところも含めて見ていただきたい。こんなにひどく落ちたところをこうして抑えて、何とか皆さんが本丸まで行けるようにしていること。そうした工夫と知恵と一緒に見て欲しいと思います。

子どもたちは、学校の授業で、のと里山里海ミュージアムも、七尾美術館も、能登島ガラス美術館も、9年間のうちには必ず行きます。ご家族でも行ってほしいのですが、地域の子たちは、祭りの担い手として「でか山教室」をやっていますが、先ほどの話のように、能登島の子を連れてって、大地主神社ででか山教室をするとか、小丸山の子を連れて行って能登島の火まつりの話をするとか。

先日、関森室長に蝦夷穴古墳の解説をしていただいたのですが、能登島の子どもたちは蝦夷穴古墳の資料館へ行っている。

(関森スポーツ・文化課 文化財復旧保全対策室長)

蝦夷穴古墳は、整備してから30年ほど経過していますが、整備当初は、古墳からの眺望が1つの目玉でしたが、その後放置してきた結果少し見にくくなっているの、少し考えないといけないと感じています。

(八崎教育長)

綺麗に修復されて、古墳の中にも入れるのに能登島小学校の子しか行っていない。そういう視点でいろいろ回るのも楽しいと思うし、もっと七尾に興味を持ってもらえるかもしれない。

(石坂委員)

自分の本当のローカルなところだけが自分の祭りだという意識しかないの、向田の火祭は僕の祭りじゃないと思う。逆に、意識的に関わりが持てれば、自分の祭りだということになる。青柏祭は七尾だけれども、山車を引っ張れば自分の祭りということになるので、もう1歩踏み込むと、今そういう時代になってきているのかもしれない。

(八崎教育長)

受け入れ側もそれなりの、広い気持ちでないとだめだし、入る側もそう。

(茶谷市長)

子どものころ、親戚のところの祭り呼ばれたりとか、そのの祭りに参加したりとか、親戚の祭りは、毎年こう見るような、場合によって参加するような、そういうような経験もあるので、それがそのまま祭りを守っていく1つの手段なのかもしれない。

(八崎教育長)

祭りのために帰ってくる。祭りのためにここにいる。次自分が担い手になって背負っていきたいと思ってくれるのが一番だけど、離れていたとしても、根っこが七尾だということを持っていて欲しい。どんな関わり方であっても、ふるさとを誇りに思っていてほしいと思います。

9 閉 会